

特別企画 「教育対談 フィロソフオスー『学』に生きる人たちへ」

Philosophos

Scuola di Atene —アテナイの学堂にて

聞き手: 奈良 潤 博士

「新しい家族関係を築く」

‘Re-building New Family Relations’

本日のゲスト教授



マーク・エコールズ博士 / Mark Echols, Ph.D.

アボット・ハウス社 (Abbott House) ファミリー・カウンセラー

&

Ed4Online.com 社 カリキュラム・デザイナー

今日は、米国のニューヨーク市から素晴らしいゲスト教授をお招きする。マーク・エコーल्ズ博士である。当企画の前ゲスト教授を務められたロムロ・ガイオソ博士 (Dr. Romulo Gayoso)と同様に、エコーल्ズ教授も私の大学院時代の友人の一人である。彼は、Family Service (離婚、里親、家庭内暴力などの家族にまつわる社会問題を扱う社会福祉学)の専門家である。特に、家族間の人間関係の回復、夫婦関係についてのカウンセリング、父親の権利および擁護、アフリカ系アメリカ人家庭や子供のための保護者教育を手掛けている。

最近、エコーल्ズ教授は、長い学業生活を終えたところである。カペラ大学大学院にて、博士論文 ‘Can Resiliency in Black Adolescent Males Be Correlated with Parenting Style?’を完成させ、今年9月に最終口述試験に合格した。彼の博士号は、11月に正式に授与された。しかし、学術家的実務家 (Scholar-Practitioner)として、彼は依然として、家族関係や地域教育についての諸問題に取り組んでいるのである。

本日のプログラムでは、エコーल्ズ教授に、ご自身の研究活動も含めた学業歴、職場において貢献してきたこと、そして、職務経験から得た教訓や哲学について訊ねてみた。

二年制短期大学から、博士号取得まで

ーこんにちは、マーク・エコーल्ズ教授。当教育プログラムにゲスト教授としてご参加して頂き、誠にありがとうございます。まず初めに教授が、カペラ大学より人間行動学の博士号をされましたこと、心より祝福したいと思います。思いますに、ご家族、ご友人、指導教授の方々や諸先生方、職場での同僚など、エコーल्ズ教授の学業におけるご成功に大変喜んでおられることでしょう。博士号取得まで、いくつもの挑戦や問題を克服していかなくてはならない、ということを想像するのは難しくありません。例えば、大学院での授業、修士論文や博士論文、試験、学業と仕事と家庭との両立、授業料などで、こういったことは他の多くのことも同様でしょう。差し支えなければ、どのようなご学歴なのか、お話しして頂けないでしょうか。教授は、高校を卒業後、二年制の短期大学に進まれましたね。ご家族の中で初めて大学に進学された人となるのですか？学校・大学生活で、一番辛かったことは何でしたか？そういった問題にどのように対処しましたか？

エコーल्ズ教授: 奈良潤博士、温かい歓迎の言葉、ありがとうございます！この「フィロソフオス」にゲスト教授として参加できて、非常に名誉なことであります。短期大学から博士号取得まで20年の月日がかかりました。そして、それは私の誇りであります。私は家族で大学に進学した第二世代になります。家族の中で父が初めて大学の学位(準学士号と

学士号)を取得したことになります。母も準学士号を取得しています。私の世代で、大学を卒業したのは私が二人目(兄が一人目)になりますが、博士号を取得したのは私だけです。

幸運なことにも家族が全面的に私のことをサポートしてくれました。ですので、私自身、自分の学生生活で何か多くの問題を乗り越えなくてはならないというわけではありませんでした。それでも、自分には大学での勉強に入るために、学力面で十分な準備ができていませんでした。このことは、大学に入学する多くのアフリカ系アメリカ人男性にも当てはまることでしょう。高校では、生徒に大学進学を目指させることもない普通科に在籍していました。その故に、外国語、入試に必要な上級数学、科学の授業を選択していませんでした。この普通科では、多くの生徒たちが大学進学を考えないことを前提にカリキュラムが組まれていました。私の高校時代の大部分において、私の学業成績に対する期待は低かったと思います。高校三年の最終学期まで、自分は大学に進学したいのか、決めかねていたのです。大学に進もうと決意したとき、私はすでにSAT(米国大学入試センター試験)のすべての試験を受け損ねていたのです。ですから、四年制大学に入学することはありえなかったでしょう。こうして、私は二年制の短期大学に進むことを考えるようになり、比較的安価な授業料という点でもよかったと思います。

この短期大学制度は、私の学業の基礎を固めることになり、それが自分の最終的な成功につながったと思います。入学試験、高校成績の最低点、SATの最低点といったことを入学に要求する四年制大学に比較して、短期大学はオープンなシステムを採っていることでよく知られています。また、短期大学は、十分な学業面での準備ができていない学生に対して、学力を伸ばす機会を与えてくれます。私にとって、短期大学は学校で成功するためのセカンド・チャンスを与えてくれ、自分で自分自身を支えるためのスキルを学ぶ機会を提供してくれました。入学当初から、高校時代とは違う姿勢で勉学に向かいました。初めて受講したクラスから準学士号を取得するまで、良い成績を維持することができました。準学士号を取得したとき、自分は四年制大学でも成功できる能力がある、と自信が出てきたのです。

一なんて素晴らしいお話でしょう！それから、四年制大学をご卒業され、さらにはカウンセリング学の修士号と、人間行動学の博士号をカペラ大学で取得されたのですね。カペラ大学の教育目標の一つは、次世代の「学術家的実務家(Scholar-Practitioner)」を養成することです。教授の場合、どのようにしてご自身の仕事上での経験を教室内での理論に、もしくは、教室内の理論を実務経験に関連付けることができましたか？カペラで学

んだことは、職場で活かされましたか？

エコールズ教授：私の場合、大学に戻って修士号を取得したかったのも、より優れた社会福祉司になりたかったからです。私が初めて児童福祉所で子供たちや彼らの家族のお世話をするようになったとき、すでに事例管理の経験がありました。しかし、社会福祉学や、精神衛生学の分野での訓練を受けていなかったのです。自分が担当した方々のうち、精神衛生や(アルコールや薬物などの)物質乱用障害の問題を抱えている人が大部分でした。それでも自分自身、トレーニングを受けていないが為に、そういった人たちのニーズに応えている、とは感じられなかったのです。彼らの要望に応じるのに必要なスキルを身につけ、より優れたケース・プランナーになるためにも、訓練を受けることの必要性を痛感したのです。こうした願望から、カペラ大学に入学することを決意したのです。

カペラで出席した講座は、子供とその家族について、現在の仕事に関連するものでした。クラスで学んだ、精神衛生のカウンセリング、物質乱用障害の療法、人間開発、家庭環境に関する理論をすぐさま自分の職場での問題解決に適用してみました。教室内の理論を職場での子供や家族の方々に適用させてみることにについて、最も興味深いことのひとつとして、彼らのニーズをより深く理解できるようになったこと、そして、彼らをサポートする上で、より適切な関係を持つことができるようになったことです。

一米国や他の英語圏の人たちが大学院に入学するのも、現在または将来の仕事に必要な知識やスキルを習得したいからです。ところで、最近、博士論文を完成させましたね。なぜ、このテーマを選ばれたのですか？どうやって研究調査を行いましたか？また、主な発見はどのようなことでしたか？

エコールズ教授：私の研究テーマは、精神的強靱さの発達具合に関する調査です。この「精神的強靱さ(Resiliency)」というのは、困難な状況を乗り越えなくてはならない際、個人がそれに耐えうるだけの人の特質をいいます。私は、この精神的強靱さという概念は、アフリカ系アメリカ人の若者に特に関連すると気が付きました。といいますのも、本来ならば人を成功に導くはずの家族、教育の機会、地域社会からの支援がないという、貧しい社会的な背景を彼らは持っているからです。(経済的かつ教育上の)機会がなく、さらには家族からの支援がないことで、多くのアフリカ系アメリカ人の地域社会に見受けられるように、高い犯罪率や暴力が生じるのです。多くの人たちがこうした劣悪な環境から抜け出すことに失敗してしまいましたが、その一方で、そうした環境に屈することなく耐え抜くアフリカ系アメリカ人の若者も多くいます。もちろん、こうした精神的強靱さという概念はどのような民族的集団にも当てはまることでしょう。ところが、このような人の特質に関

する興味深い疑問点は、その回復力の原因について誰も特定できないままだということです。同じ地域内で、同じ通りで、同じ家族内でさえも精神的強靱さについての相違が生じるのか？私の研究は、そうした疑問点に回答するためのものです。特に私が注目した点は、アフリカ系アメリカ人成年男子における精神的強靱さと、彼らの子育てのあり方との間に何か相関性があるのか、ということです。

アフリカ系アメリカ人男性における精神的強靱さと子育てのあり方との間に、何かの相関性が見出されてきたわけではありませんでした。こうした相関性は以前の研究において確立されてきたわけではないので、両者の間の相関性があるのか、ということを見出す必要があったわけです。結果として、両者の相関性を見出すのに適切な調査方法を選択したのです。研究調査をするのに、参加者による自己申告制という非実験型定量的手法を採りました。被験者は、大学に入学した 18-20 歳のアフリカ系アメリカ人成年男子です。大学生たちを選んだのは、高い確率で精神的強靱さを兼ね備えていると考えられたからであり、そこに彼らが受けてきた子育てのあり方との関連性を見い出せると思ったからです。調査は、間隔をあけてデータ収集され、「子育てに関する親の権威度を測る質問(Parenting Authority Questionnaire, PAQ, Buri 1991)」と「子供および青年の精神的強靱さを測定する尺度(Resiliency Scales for Children and Adolescents, RES, Prince-Embury 2006)」によって分析しました。精神的強靱さを測定するために、100 人のアフリカ系アメリカ人の男子大学生たちが、三種類の「青少年の精神的強靱さの基準(RES)」によって測られました。被験者らは PAQ に回答してもらい、彼らが、寛容な、高圧的な、または権威主義的な親によって育てられたかについて決めるというものです。さらに付け加えて、被験者の人種、学歴、所得水準、家庭環境についての分布図も作成しました。

調査結果を分析するために、被験者一人一人の PAQ と RES の結果を点数化にしたのです。PAQ の点数については、全部で 30 点から成り、そのうち、10 点分が権威主義的な子育て、他の 10 点分が高圧的な子育て、さらに 10 点分が寛容な子育て、というように配点しました。各配点の点数が高いほど、その人が受けてきた子育てのスタイルがより強く反映されるというものです。RES による点数化は、回答の合計得点を二つの基準点に加算し、さらに T-得点による平均化(訳注:偏差値分布のこと)をとってみました。RES の得点化に続いて、T-得点を用いて PAQ での得点との相関性を調べてみました。双方の点数が SPSS(訳注:IBM 社の統計分析ソフトウェア)にかけてみて、相関係数をとってみました。今回の調査の結果で判明した主なこととは、100 人中 95 人が RES に回答したのですが、その平均値に両者の相関性が見受けられたということです。高圧的、または権威主義的な子育て環境の中で自分の精神的な強靱さが養われたという回答者が

大部分でしたので、先の相関性については、「母親が権威主義的だったのか」、「母親が高圧的だったのか」、「父親が権威主義的だったのか」、「父親が高圧的だったのか」、に区分して算出されました。調査の結果で判明したことは、アフリカ系アメリカ人成年男子において、(自分が受けてきた)子育てのあり方と精神的強靱さの発達についての相関性は見られず、唯一の例外として、父親の権威主義的な子育て方法という点を除いて、ということです。実際、ピアソンの相関係数は $r = .472$ でした(訳注:相関係数 r が、 $0.7 > r$ のときは相関関係が強い。 $0.4 < r < 0.7$ のときは中間の強さ。 $0.2 < r < 0.4$ は弱い)。

今回の調査から、アフリカ系アメリカ人成年男子の間で、子育てのやり方と精神的強靱さとの正の相関性は見受けられませんでした。それでも、今回の発見は、アフリカ系アメリカ人社会における子育ての方法に関する最近の研究を支持するものです。それは、父親の権威主義的な子育て方法がアフリカ系アメリカ人の間で否定的に認知されているわけではないこと、そして、父親の存在がアフリカ系アメリカ人青年男子の学業の成就に関して大きな影響を及ぼしているということです。今回の研究は、青年たちに見受けられる、高圧的な子育て方法と精神的強靱さに関する正の相関性、権威主義的な子育て方法と精神的強靱さに関する負の相関性という以前の調査結果に挑戦する形となりました。今回の研究の結果で明確になったことは、この調査に参加したアフリカ系アメリカ人男性たちにとって、なぜ彼らの間で高い精神的強靱さが見受けられたのかについての補足的で、かつ根拠のある要因が模索されたことです。私の博士論文における研究の詳細は、パワー・ポイントのスライドに含まれています。

—私のような日本人男性からみて、「アフリカ系アメリカ人青年にとって、権威主義的な子育て方法は否定的な見方をされていない。また、父親の存在は、アフリカ系アメリカ人青年の学業成績に影響を及ぼす」、という研究調査結果は興味深い事実ですね。日本では、特に私の世代(年齢 30 歳代)で、権威主義的な父親はもう稀な存在です。それでも、私の親の世代にそういう父親はいますが(笑)。エコーल्ズ教授のお父様はどのような方でしょうか？お父様の人格や子育ての方法についてお話していただけますか？お父様の子育て方法が、エコーल्ズ教授の学業上、また、職業上での成就に結び付いたと思いますか？

エコーल्ズ教授: 私の父親は、高圧的というよりもはるかに権威主義的でした(実際のところ、両親揃ってそうでしたが)。でも、自分は両親に支えられ、そして愛されていると感じていました。私は、自分が家族を持って養うということについて、父の影響を受けていると思います。私の父親の子育て方法によってではなく、このことこそが何よりも自分の学業や仕事での成功に影響を与えてきたと思います。自分の経験から、権威主義的な親に

よる子育て方法からでも子供が愛され、支えられていると感じられるものなのです。その一方で、親によっては別の子育て方法をとる人もいます。こうしたことから、自分の研究結果についてはまったく驚くまでもなかったのです。私が信じることとして、今回の私の調査に参加してくれた若者たちの多くは、彼らの親御さんたちが権威主義的な子育て方法をとっていたのにも関わらず、親御さんに支えられていたと感じていたということなのです。しかし、このことを確信するためにも、定質的手法、または定量・定質的複合手法を用いて調査しなくてはなりません。

社会福祉：家族を再構築する

—エコーズ教授は、社会福祉士としての職務経験が14年以上もあり、教育現場、社会福祉の現場で、特にアフリカ系アメリカ人の子供や彼らの家族の人たちのために働いてきました。そもそも、どうして社会福祉士になろうと思ったのですか？

エコーズ教授： 私はもともと学校の先生になりたかったのです。それで、2000年から5年間ほど、学校の教育現場で働いていました。そこで私は、「危険性のある子供」を対象とした放課後の教育プログラムにおけるケース・マネジャー（訳注：個々の事例、個人の必要性に応じた適切な対処法を見いだすことを仕事にする職員。英語で、follow-up worker ともよばれる）の仕事にも就きました。このプログラムは、主にアフリカ系アメリカ人やヒスパニック系の生徒を対象としており、彼らは犯罪を犯したり、学校を退学する可能性が高いとみなされている子供たちです。子供たちの大部分は、低所得地域の出身で、彼らは教室の中でも（勉強についていけず）苦しい思いをしていて、それは彼らの家庭環境が落ち着きがないからなのです。この放課後の教育プログラムで私が悟ったこととは、そういった多くの生徒たちにとって、学校が直面している課題とは学習そのものではないということ。そこでの教育において特化されるべきこと、関連があると考えられることとは、彼らがその日の夜に何を食べるのか、また、どこで寝るのか、ということに彼らが取り組まなくてはならないということなのです。こうして私は、教師ならば指摘することが出来ないであろう問題点を明らかにするために、社会福祉および児童福祉の世界に入ることにしたのです。

—なるほど…。簡潔に、今の職場であるアボット・ハウスとEd4Online.comをご紹介します下さい。主な職務は何でしょうか。

エコーズ教授： アボット・ハウスは、里親制度のための施設です。この里親制度というのはどの国にもあるとは思えないので、それが何であるのか、簡潔に説明したいと思いま

す。里親制度とは、自分が生まれた家庭から引き離された子供を世話する制度のことです。そういった子供たちの多くが元の家庭から引き離されたのも、家庭内暴力によるか、両親が子供を養うことができない(通常、薬物中毒や精神的な病気が原因)からです。その子供が孤児であるからとか、身が危険だからといって親が自発的に子供を里親に出す場合は稀です。里親の施設は、家族がその子供を里親に出すことの心配ごとについて、対処します。里親制度の主要な目的として、家族関係を常に復縁させることです。しかし、それが難しい場合、養子縁組という別の目的も私たちの施設にはあるのです。

私が初めて里親施設に勤務することになったとき、ケース・プランナーとして働くことになりました。ケース・プランナーとして、子供の実の親で、家族関係の復縁を希望する人たちや、里親施設で子供との永続的な関係を維持したい親である人のお世話をしてきました。私は、実の親に当たる人たちに、物質乱用抑止プログラム、精神衛生サービス、子育て方法のクラス、家庭内暴力のクラス、その他の法廷が関与するような(ある特定の場合に適用される)サービスを提供してきました。また、実の親とその子供の面会のアレンジをしたりしました(これは、子供の安全性を確認し、前向きな交流ができるように監視することも含まれる)。それ以外には、そういった家族のために実施してきた福祉事業に関する書類を作成し、経過報告書をニューヨーク家庭裁判所に提出したりもしました。

ここ5年、私は「家族関係修復メンター(Family Team Conference Facilitator、以下、FTC メンターとする)」として働いてきました。この役職と最も近い職種として、コンサルタントや政策決定の専門家でしょうか。FTC メンターとして、私は里親施設内で、実の生みの親やその家族に会い、家族内の人間関係が修復させるという目的に向かっているのかについて話し合います。また、里親や子供に会い、他の手段として今後の新しい家族関係について話し合います(つまり、その里親と子供が今後、親子として生きていくということ)。これは、養子縁組、親戚・近親者への縁組、独立して生きていくなどの目的に向けての話し合いということです。このことに付け加えて、安全性や(家族関係の)永続性に関する点についても話し合いの中で強調しています。

Ed4Online.comでの仕事は、アボット・ハウスでの仕事内容から乖離したもので、より教育的なものです。Ed4Online.comは、大人向けのオンラインの生涯教育プログラムです。Ed4Online.comは成人向けの教育講座を個人や大学に提供しています。私は、健康・人間福祉の分野の専門家です。そこで、そういった分野でのオンライン教育のカリキュラムを作成しているのです。この作業には、測定可能な目標が伴うさまざまなテーマについての専門的な書類作成も含まれており、試験、紙面のプレゼンテーション・ファイルもあります。また、他のカリキュラム・デザイン・チームの人たちと協力して健康・人間福祉

の領域における生涯教育で、興味深い最近のテーマについても見つけ出しています。

一理由を要約してまとめることは難しいかもしれませんが、エコールズ教授の観点からして、家庭内の人間関係の問題の原因とは何でしょうか？もしよろしければ、ご自身の職務経験から最も衝撃的なお話をお聞かせ下さい。そういった方々に対してどのように援助されたのですか？

エコールズ教授：人間関係における不和の原因を引き起こす問題のいくつかは、環境や家庭内におけるストレス要因でしょう。そういったストレス要因には、コミュニケーションの欠如、失業や不完全雇用（能力以下の仕事に従事すること）による金銭的な問題、教育機会の欠如、夫婦間における子育て方法やその考え方の相違、性、家族関係（両親がそろっているか、片親しかいないのか、など）でしょう。家庭内で見受けられる問題は、しばしば結果として、私たちが今日よく知っている社会問題に発展しています。例えば、アルコール・薬物乱用、家庭内暴力、精神的疾患、そして児童虐待です。私は今まで、環境上のストレス要因の多くが根本的な原因となって、そういった家族が児童福祉施設に子供を預けることになったことを見てきました。

恐れ入りますが、守秘義務があるため、特定の事例や、私の職場での詳しいお話をする事ができません。しかし、私がここでお話できることとして、里親制度での心痛い傾向として、多くの家族が児童福祉施設に子供を預けた経験が過去にあるということです。子供を里親に出す多くの親自身が、里親で育った経験があるということです。場合によっては、その祖父母も子供の頃に里親で育ったということもあります。これは、私の、専門家としての意見ですが、児童福祉制度の大きな欠陥の一つとして、世代間の観点からその家族の必要なことを見出そうとしないことが挙げられる、ということです。もしある家族に親子二代、三代にさかのぼって物質乱用の傾向が連続して見られるのならば、その家族・一族の過去から、（それを抑制するために）何らかの治療が必要となることでしょう。

ケース・プランナーおよびFTCメンターとしての私のアプローチの仕方は、一貫して同じです。私は、そういった家族の方々に対して同情の気持ちを持って接します。その親たちに敬意を表し、最も重要なこととして、私は彼らを助けたいという気持ちを知ってもらいたいのです。そういった親たちの多くは、児童福祉施設に来たときにもものすごく怒ることもあります。私は、そういった怒りの気持ちもよくわかります。彼らから自分たちの子供が引き離されるわけですから。彼らは子供に安全な環境を提供することが出来なかったかもしれませんが、それでも自分の子供たちのことを愛しているのです。私は、そういった家族の人たちに知ってもらいたいこととして、私の一大目標は、親と子供を引き離すことではなく、家

族関係を再構築することなのだ、ということです。また、知ってもらべきこととして、私がここにいるのは、そういった彼らを助けるためである、ということです。私が気が付いたことは、里親施設が彼らに害するために存在するのではなく、むしろ援助したいために存在するということを彼らが認識したとき、彼らの気持ちが和らぐということです。もちろん、すべての家族が人間関係を再構築できるわけではありません。それというのも、多くの親たちが、自分の行為によって子供を里親施設に送り込むことになったことを認識し損ねているからです。それでも重要なことは、そういった親たちを助けたい、というこちらの意思をわかってもらえるようにすることなのです。

一もし子供が、貧しくて教育を受けていない家庭から生まれ育ったとすると、その子供は大学に進学して給料のいい仕事に就く機会が限られてしまうかもしれません。そういう人は将来、やはり似たような社会的背景を持つ人と結婚することになるでしょう。こうした悪循環を断ち切るために、私たち教育家は、そういった人たちに対して、また社会全体に対して、どのようなことができるのでしょうか？ 私たちは何をすべきですか？

エコールズ教授： この悪循環を断ち切るために第一にやらなくてはならないことのひとつとして、そういった人たちの行動が秩序を乱すものであることを、彼らに認識してもらうことからです。大抵の人々は、自分が生まれ育った環境は「普通」だと思っています。控えめに言っても、そういった環境は彼らにとって普通なのです。他にやるべきこととしては、そういう悪循環に陥っている人たちに、自分は周囲を変えることができる、という自己効力感を持たせるようにすることです。私が信じることとして、教育というのは、何が健全で、何が健全でないのか、また、何が秩序あることであり、何が無秩序なのか、ということの人々に理解させることができる可能性が秘められていると思います。また、教育とは、個人の自己効力感を向上させることができるので尊いのです。しかし、アメリカの教育制度が常に抱えている主な課題とは、低所得者層と富裕層の間における資源のギャップのことです。

私がまた信じていることとして、教育家というのは、自分たちが奉仕する(子供を含めた)家族が必要としているものを明確にする義務があるということです。低所得で教育を受けていない親が必要とするもの指摘するのならば、資源が不足しているということが重要な要素となるでしょう。多くの親たちは仕事を休んで学校に行くだけの経済的な余裕はありません。また、その一方で、他の親たちは子供の勉強を教えることが出来ないのです。それというのも自分たち自身が勉強がわからないからです。学校というのは、地域において必要とされるものを提供するべきなのです。学校は、親たちが子供や教育に関心がないと考えるべきではありません。家庭が何を必要としているのかを明確にすることが重要で、そうすることで子供が成功する可能性を高められることになるのです。

—エコーल्ズ教授のお話や、世界各地で聞かれる似たようなお話からわかることは、親に愛されていない子供たちが数多くいるということです。すでに仰られたように、そのような親というのは心身上の問題、経済的な問題、またはそれ以外の深刻な個人的な問題を抱えているものです。もちろん、どのような子供であれ、自分一人で生きていくことはできません。多くの場合、彼らは里親が必要となることでしょうし、教育の機会、経済的な援助なども必要です。それでも私が思うのは、そういった子供たちが実の親に愛されていないが故に、子供たちは「自分は必要のない人間だ」と思ってしまうかもしれません。そのような子供たちに、エコーल्ズ教授はどのようにして激励されているのですか？

エコーल्ズ教授： これはいい質問ですね！ 非常に困難な家庭環境上の問題に直面している子供たちを励ます最良の方法は、私が思いますに、彼らはそういった環境そのものではない、ということを彼らに理解させることなのです。私が意味することとは、彼らの人生は、すでに運命づけられているのではない、ということを認識させることです。里親施設には多くの子供たちがいます。しかし、そこから人生の困難な諸条件を乗り越えて社会的に成功をおさめたかつての子供たちもいるのです。私は、そういったサクセス・ストーリーを子供たちに聞かせてあげるのです。

教育を通して、偏見や差別と戦う

一次に敏感にならざるを得ない社会問題についての話題に移りたいと思います。非常に最近のことですが、アメリカで悲しい出来事がありました。白人の警察官が黒人男性を不当に銃殺したのにも関わらず、その警官らは不起訴になったという事件です。ご存知の通り、各大都市でデモや暴動が生じました。学校・大学(また、企業の人材研修も含めて)といったアメリカの教育機関で、人種、性別、宗教、その他の社会的・文化的な要素によって差別が依然として存在すると思いますか？ 個人的な見解をお聞かせ下さい。

エコーल्ズ教授： 1950 年代、60 年代の市民権運動から、アメリカは人種問題については明らかに前進したといえます。しかし、依然として、取り組まなくてはならない課題があるのです。人種、性別、宗教による差別は、アメリカ社会において未だに存在する社会悪であり、学校や職場で存在します。特にアフリカ系アメリカ人男性は、学校教育における学業成績の格差に見受けられるような差別を克服するのに苦しんでいました。全米黒人男子学生学業調査(National Black Male College Achievement Study)の報告によると、アフリカ系アメリカ人男子高校生のうちのわずか 47%が 4 年以内に高校を卒業しておらず、それに対して、白人男子高校生のうちの 78%が 4 年以内に高校を卒業しているということです。他の人種のグループと比較して、アフリカ系アメリカ人の生徒における高校で

の準備不足の相違は、大学レベルでの学業の準備不足にも見受けられるのです。2002年に大学に入学したアフリカ系アメリカ人男子学生の比率は、全学生数の4.3%ほどで、これは30年前の1976年と変わっていません。さらに、6年以内に大学を卒業して学士号を取得することができたアフリカ系アメリカ人は33.3%ほどで、これに対して、学生全体の平均は、6年以内に卒業できた割合が48.1%ということになっています(*)。

もちろん、アフリカ系アメリカ人男子学生が高い学業成績をおさめられないのは、差別によるものではなく、むしろ能力に問題がある、という批判があることは確かです。これは私自身の経験談であります。小学校、中学校、高校と勉強に苦しんできたアフリカ系アメリカ人男性として、周囲の人々がそれほど自分に期待してくれない状況では、意欲を失うものです。これは、個人だけでなく、他の集団でも当てはまることでしょう。教師、カウンセラー、その他の施設がアフリカ系アメリカ人男性にそれほど期待してくれないような状況において、彼らは自己実現に対するモチベーションを失うものです。私が、もがき苦しんで小・中学校から博士号取得まで到達できた学業の旅とは、ある日突然、私が賢くなったからではありません。そうではなく、自分がはじめ思っていたときよりもっとできるのではないかと信じるようになったからであり、また、自分の潜在能力を発揮してみたかったからです。また、私には自分を応援してくれる家族がいて、何か必要ならば、献身的になって指導して下さる先生方がいました。アフリカ系アメリカ人男性が望ましい結果をもたらすために必要なことは、精神的な強靭さを発達させるための自分の研究の基礎となったのです。研究によって極めて明確になったことは、地域社会によるサポートこそが、アフリカ系アメリカ人男性を幸せにして成長させるための重要な要素だということです。教育とは、地域社会を支える柱の一つである故に、アフリカ系アメリカ人や他のマイノリティの教育格差を縮める必要があるわけです。

(*)参考資料:

Harper, S. R. (2012). Black male student success in higher education: A report from the National Black Male College Achievement Study. Philadelphia: University of Pennsylvania, Center for the Study of Race and Equity in Education.

—私自身の学習経験と職務経験から言えることですが、教育というのは人の先入観を最小限にできる一方で、最大限にもできる力があると思います。例えば、私がカペラ大学院生だったとき、ほとんど差別というような体験をしていません。数人の教員が私に対して、「あなた、誰?」、「出身地はどこ?」、「英語はあなたの母語?」などというような疑い深いような態度で見つめていただけです。カペラを卒業して、その後、東南アジアで三年間ほど教育コンサルタントとして働いていました。しかし、そこで私が気が付いたことは、

第一次・第二次世界大戦での出来事について日本や日本人に対して憎しみを持っている人がいたということです。彼らは、自分たちが貧しいのは、70 年以上も昔に日本が自分たちの国を侵略したからだと信じています。実際問題として、日本政府はアジア諸国に賠償金を支払い終えていますし、今日まで政府開発援助(ODA)を毎年行っています(外務省によると、2014 年度は約 5,502 億円を東南アジアを含めて開発途上国に援助している)。私独自の調査によると、彼らは皆、この事実をまったく知りませんでした。学校の先生も、この事実を生徒たちに教えていませんでした。これはまるで、「恩を仇で返す」ようなものでしょう。もちろん、東南アジアには親日の人たちも多くいます。私の主張はこうです:教育は「諸刃の剣」のようなものだ、と。このことについて、どのようにお考えになられますか? 似たような体験はないですか?

エコールズ教授: 私が思うのは、教育というのは人々に新しい理解と視点を与える力を持っているが、変化に対して抵抗する人々も常にいるということです。教育の限界とは、その質を問わず、それが環境によって制限されている、ということでしょう。例えば、あなたが提示された事例で言えば、恐らく、東南アジアの外に出たことがない人々は、日本からやって来た人に対して好ましい体験をしたことがないのでしょう。結果として、そういった人たちは、日本人なら誰に対して憤りと偏見を依然として持っているということになるでしょう。このことはアメリカでも同じです。アメリカ白人で、アフリカ系アメリカ人と好ましい交流をする機会に恵まれなかった人なら誰でも、人種的な固定観念を持っているものです。たとえ仮に、そのアフリカ系アメリカ人が教育を受けていたとしても、です。このことはアフリカ系アメリカ人で、白人と好ましい交流をする機会に恵まれた人についても同様でしょう。

新しい「学術家的実務家」として...

—最後になりますが、エコールズ教授の教育哲学と将来への展望をお聞かせ下さい。ご自身の就学経験や職務経験から、「優れた教育的指導者」、または「教育現場における優れたリーダー」というのを、どのように定義されますか?

エコールズ教授: 私の教育哲学とは、自分自身が生徒・学生として、小学校、中学校、高校と勉強で苦しみ、最終的に博士号を取得するまでの「学業の旅」の中から生まれたものです。多くのマイノリティーで低所得家庭出身の学生にとって、適応性ということが学生生活における課題の一つとなります。調査によると、マイノリティーで低所得の学生たちは、十分な経済的な支援がなく、十分な学力が不足しており、大学生活に適応することが困難な状態にあります。こうした困難な事柄によって、マイノリティーの学生、低所得

の学生、主流派ではないその他の学生たちが大学入学を遠ざける要因となっており、また、学位を取得する上での障害になり続けているのです。私は、マイノリティーで低所得の学生の一人でしたが、大学の勉強が自分の毎日の生活にいかに関連するか、ということを見出すように挑戦してきました。教室の中で教わっていることを自分のものに消化することで、大学生活において勉強に打ち込むことができたのです。大学という場所は、自分の能力を高めるための場所だったのです。そして、教室内で学んだことを自分の人生や地域社会において関心があり、重要だと思われる分野に適用するための機会を得たのです。

私が信じることとして、大学は、人々が自己実現することができるためのだけの場所ではないと思います。大学は、かつて勉強で苦しい思いをしていた学生が、学業上での成功をおさめるためのセカンド・チャンスを得るための機会でもあると思います。自分の教育哲学からして、私は短期大学やオンライン教育を熱烈に支持します。それによって、非主流の学生たちが成功をおさめるための機会を与えてくれるからです。私が信じる優れた教育的指導者とは、教室での内容を学生に関連づけることができ、彼らが自分たちのゴールを見出せるような技術を教えるための機会を追求する人のことでしょう。優れた教育的リーダーとは、自分たちのことを、知識の教授を促進するのが役割だと思っている人たちでしょう。そういった指導者たちは、教室内における学生の多様なニーズや能力に適合した教育方法をとることでしょう。このような方法によって、教室内の授業内容を学生たちに関連づけるだけでなく、学生各人が成功するための最大のチャンスを与えられることになる、と思うのです。

—これが最後の質問になります。新しい学術家的実務家として、どのようにして、他人、特に困難な状況におかれている人たちを励ましたいと思いますか？どのようにして、人々や環境を変えたいとお考えですか？

エコールズ教授： 私が信じていることとして、自分は素晴らしい機会を与えているのだということです。それは、子供たちとその家族が人間関係を修復させ、より好ましい家族としての営みを生み出し、よりよいコミュニケーションと相互理解を促し、全体的な幸福をもたらすために働くことができるという働き続けられるという機会のことです。私はこの仕事を今後も続けていくつもりですし、主が私に期待している、周囲を変えることになる唯一のことは、そういった家族を救うという使命のことでしょう。

—エコールズ教授、ご自身のお仕事や研究活動でご多忙であるにも関わらず、貴重なお時間を割いて下さり、誠にありがとうございます。本当にありがとうございます。

(写真提供:マーク・エコーल्ズ博士)

ご感想、ご質問については、以下のアドレスまでメールを下さい。

skybusinessjpn@gmail.com